

都道府県別賞一等

保険で咲く笑顔

長崎県 長崎市立山里中学校 三学年

黒川 海空

パンケーキを頼んで、私はスマホを見始めた。母の友達との喫茶タイムに付き合わされていた。そう、退屈な時間の始まりだ。

「上手に加入させてもらっているね。」

母は安心したようであった。ふわふわのパンケーキに感動しながらも、耳だけは母と友達との会話に向いていた。ひとしきり話した後、彼女は「ありがとう。」と母にお礼を述べ、店を出た。お礼の理由は保険の話聞いてくれたからだそう。彼女は保険を学び、資格を取りながらキャリアアップを目指している。駆け出しの彼女はたくさん人の生活設計を見て、学びたいようだ。仕事に就いて、まだ試験があるのかと大変そうにも見えたが、彼女はきらきら輝いてみえた。

「保険って難しいけど面白いとよ。種類がたくさんあるし、人の人生も様々だしね。」

お客様からの「保険に入っていてよかった。」の一言が何より嬉しいそう。生活設計のお手伝いをする仕事にやりがいを感じるという彼女の笑顔は素敵だった。退屈な時間は結構有意義な時間だったと思いつつ店を後にした。

「じじが検査で入院するけん、いつとき遊びに連れていけばいい。」

毎年祖父母が冬休み中、孫四人を連れて遊びに連れて行ってくれる恒例行事。長引く検査入院。祖母は新型コロナの影響で病院が混み合っているからと話を濁っていた。祖母は、嘘が下手だ。祖父は何かの大病を抱えているに違いない。案の定、退院後、髪が抜け、やせ細った祖父がいた。あのじじが。いつも元気に炭火焼屋の店に出て、火を起こしてはいたではないか。本当に人生何が起こるか分からない。人生は「そんなまさか」との隣り合わせだ。通院、検査、入院（しかも祖父の希望により個室）、治療。度重なる出費があっただろう。

「贅沢に個室だったけど、高額療養費制度もあったし、保険に入っていて助かったばい。」

祖母は話しながら、笑っていた。母の友達のことを思い出した。まさにこれが保険に入っていてよかったーの笑顔かと実感した。命あつての人生だとは思う。しかし、そこに経済的な不安があると心の底から笑えない。

「保険って難しいね。一日更新手続きが遅れて、加入していない次の日にケガしたとき。足は痛いし、懐も痛かしね……。」

第61回中学生作文コンクール

また祖母は笑って話した。本当に人生何かあるかわからないものだ。

「保険って難しい。」母の友達も言っていたことを思い出した。日本での家族の生命保険加入率は約九割らしい。私も大人になったらきっと加入するであろう生命保険。保険の種類は？掛け金は？コマージュでよく見る保険の代理店に頼る？学校の授業で生命保険について教えてほしい。自分の将来と向き合う大切なことだ。将来社会を生き抜くためには保険があれば心強い。

祖父の退院後数日たった後、母が急に一枚の紙を出してきた。そこには「黒川家の保険一覧」と書かれていた。家族の名前の横に、保険名、保障内容が簡単に書かれている。そして、「二〇二七年満期H二〇」と書いてあるその意味はすぐにわかった。私が大学に入学する年だ。きっと生まれてすぐに私を保険に入れてくれたのだろう。その大雑把にまとめられた紙の最後には、「私に何かあったときは手続きよろしく。」とあった。几帳面というか、適当というか、母の性格が入り混じった言葉の裏に、深い優しさと愛情を感じた。できれば、何かあって受け取る保険より、笑顔で一緒に迎える満期がいいと思った。

何かあってほしくない。でも何かあるが日常にあふれている。そのリスクに備え、保険をかけることは、私たち文化人の知恵だと思う。自分や大切な人を守りたいと思う心で保険は支えられている。保険の印象は「難しいもの」から「明るい未来を支えるもの」に私の中で変わった。保険を通じてたくさんの人達の笑顔を見てきたからだ。保険の契約と一緒に人の絆も結んでいるように思えた。